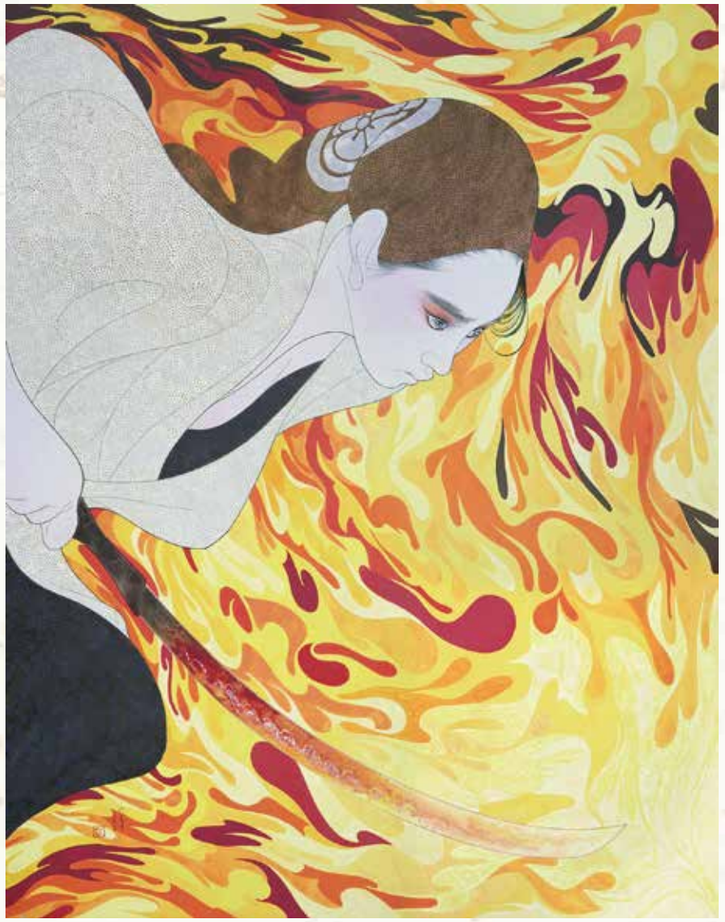
特集

芸術の秋を楽しもう

「歌留多」（部分）2019年　和紙に岩絵具・顔彩



「刀鍛冶」2021年　和紙に岩絵具・顔彩

「鷹匠」（部分）2018年　和紙に岩絵具・顔彩

「流鏑馬」2019年　和紙に岩絵具・顔彩

記念展「ふるさとのために」は、作品を順次入れ替えながら開催中です。今回ご紹介している「一瞬間の〝煌めき〟」の５作品は、現在の第３期では展示されておりません。ご了承ください。

「ねぶた師」2020年　和紙に岩絵具・顔彩

ふるさとのために

“風の画家”中島潔さん

佐賀新聞社に作品130点寄贈へ

「芸術の秋」の到来です。一年の中で最も穏やかな季節で、美しい絵画などを鑑賞していると、知的好奇心が刺激され、何ともいえない心地よさに満たされます。今回の特集では、〝風の画家〟として知られる唐津市厳木町出身の中島潔さん（81）＝静岡県熱海市＝が佐賀新聞社に寄贈する作品を一般公開している記念展「ふるさとのために」の魅力とともに、佐賀新聞文化センターの人気講座のいくつかを紹介します。

郷愁を誘う童画やはかなげな女性画を得意とし、〝風の画家〟として知られる中島潔さんが、佐賀新聞創刊１４０周年を祝い、代表作や未公開作を含む１３０点を寄贈されることになりました。佐賀新聞社では、作品を受け入れる財団の設立準備を進めるとともに、新聞社内併設のギャラリーで寄贈作品を順次一般公開しています。

１３０点のうち52点が未発表の作品です。画家を目指してパリ放浪の旅に出た前年の１９７０年に描いた未発表作品から、令和を生きるしなやかで強い女性像を表現した展覧会「一瞬間の〝煌（きら）めき〟」（２０２２年、佐賀県立美術館）で発表した「杜氏（とうじ）」や「刀鍛冶（かたなかじ）」などが含まれています。

中島さんは「僕なりに懸命に描いてきた絵は、僕自身だと思う。気持ちや体内にふるさとがとても強く残っていて、いずれは作品をふるさとにという気持ちがありました」と話されています。

「唐津くんち」2012年　和紙に岩絵具・顔彩

「女性美の情景」など20点 新聞社ギャラリーで展示中

佐賀新聞社内の併設ギャラリーでは、中島さんが寄贈される作品を一般公開する記念展「ふるさとのために」が8月から定期的に開かれています。展示替えを経て、いまは第3期を迎えており、「女性美の情景」がテーマの作品を中心に20点を展示しています。第3期は11月19日までで観覧無料です。

8月から継続して展示している、金子みすゞの詩をモチーフにした代表作「大漁」をはじめ、「女性美の情景」をテーマにした作品や、ふるさとの秋を描いた作品で構成しており、会場には連日、中島さんのファンが大勢お見えになられています。多久市出身で50年来のファンという女性は「先生が描かれる作品は、わらべから妖艶な女性まで皆すてきです。心が癒やされます」と話されていました。

公開は平日の午前10時から午後5時半まで。新聞社ロビーには、先生がふるさとへの思いを込めた大作「唐津くんち」も展示中です。

「ｍａｉｌ」（部分）　2012年　和紙に岩絵具・顔彩

懸命に描いてきた絵は、僕自身

中島 潔さん

18歳で母を亡くし、ふるさとを出て絵を描き始め、81歳になりました。僕の気持ちの中、体内には、ふるさとがとても強く残っています。最初に伊豆の下田で温泉掘りの仕事をしたときに接したみなさんの温かさも絵の基本になっており、子どもや女性の優しさを大切に描いてきました。清水寺のふすま絵、六道珍皇寺の「地獄絵」に続き、令和の女性を描き終えて一区切りがついた時、「最後に描いた作品をふるさとに置ければ」と思いました。佐賀新聞社は140周年と聞きましたが、佐賀の人のことを思い、その幸せに寄り添ってきた企業だと思います。懸命に描いてきた絵は、僕自身です。両親やおじさんおばさんもよかったと思ってくれると思います。

「永久への言葉」　2017年　和紙に岩絵具・顔彩

「ベジタリアン」　2015年　ケント紙に水彩

「雪の忘れもの」　2016年　ケント紙に水彩

冬がテーマの２作品は
第４期で展示される予定です。

「こいさん」　2018年　和紙に岩絵具・顔彩

第３期では、代表作「大漁」や「女性美の情景」をテーマにした作品など20点を展示している＝佐賀市の佐賀新聞社ギャラリー

佐賀新聞社ギャラリー
住所／佐賀市天神三丁目２番23号
問／総合案内：☎0952-28-2111
午前10時～午後5時30分

第３期「女性美の情景」
～11月19日まで
観覧無料

［　記事：杉原孝幸　　デザイン：蒲原貴子　］

佐賀新聞文化センターカルチャー教室からご紹介します

芸術の秋を楽しもう

早瀬 美佐子 先生

楽しい水彩画・金曜コース

第1・2・3・4金曜日
13:00～15:00

「水彩画は透明感、すがすがしさが魅力です。優しい色による表現も、力強い表現もでき、日本の風景を描くのにもよく合います」。こう話すのは、佐賀新聞文化センターで「楽しい水彩画・金曜コース」の講師を担っている早瀬美佐子先生です。

早瀬先生は水彩連盟の同人で、文化センターで教室を受け持つようになってから10年以上になります。透明感あふれる色使いや繊細な筆致が見る人を魅了し、水彩連盟展や光風会展、県展などで数々の入賞を飾られていますが、親交のあった二科会佐賀支部の高柳博先生から講師の後任を託されたことがきっかけで、文化センターの講師も担うようになりました。

教室は1回2時間です。お訪ねした日は、教室の真ん中に花瓶などの静物が置かれ、生徒さんそれぞれが画用紙に向かわれていました。下描きが終わった方から彩色へ。早瀬先生は絵筆を握る生徒さんの後ろから作品を見つめ、穏やかな表情で色使いや構図についてアドバイスをされていました。

早瀬先生は、幼いころから家の中に絵具がいっぱいあり、それを溶かして色水を作ったり、混色を楽しんだりして遊んでいたそうです。「表現したいという思いは、人それぞれです。その方の感性を大事にしています」と早瀬先生。教室は長年通って来られている方、新しく入られた方でとても和やかな雰囲気です。通い始めて10年以上になるという女性は「先生は自由に描かせてくださいます。絵筆を握ると、気持ちがとても豊かになります」と笑顔で話されていました。1カ月に1つのペースで作品を完成させ、額装して自宅玄関に飾ることが楽しみだそうです。

コロナ禍が落ち着き、外出する機会も増えてきました。「絵を始めてみたいと思われている方、仕事などの都合で一度やめられた方も、ぜひ教室をのぞきに来てください」と早瀬先生。絵は日々の暮らしに潤いを与えてくれます。

北欧デンマーク生まれのダネラ（手創りじゅうたん）

第1・3火曜日
10：00～12：00

小宮 和子 先生

「ダネラの魅力は、デザインや色合いを自由に決められるところ。じゅうたん、タペストリー、クッション、玄関マットから大型のセンターラグまで幅広い作品を作ることができます」。北欧デンマーク生まれの手創りじゅうたん「ダネラ」についてこう語るのは、日本ダネラ協会九州地区福岡支部長で、佐賀新聞文化センター・エスプラッツ教室で講師を務めている小宮和子先生です。

小宮先生とダネラの出会いは運命的でした。45年ほど前、東京の百貨店の展示会で初めて見た時、その色彩の美しさや重厚感に目を奪われたそうです。「じゅうたんは買うものだと思っていましたが、自分で作れることを知りました」と小宮先生。作品づくりに没頭して技術を習得。その後、ふるさと九州に戻ってきましたが、福岡・天神の百貨店で開いた展示会が人気を集めたことが、講師就任のきっかけになりました。

エスプラッツの教室は第1、第3火曜日の月2回です。生徒のみなさんは、小宮先生にアドバイスを受けながら、小型のハンドミシンを使い、キャンバス上の図案にダネラ糸をスピーディーにステッチされていきます。前進・後進・ループの高さ調節など自由自在にできるため、さまざまなデザインの創作が楽しめます。

教室は和気あいあいとした雰囲気です。黙々と作り続けるといった感じではなく、仲間との会話を楽しまれています。ファッションやおいしいお店の情報交換など、いろんな話が弾むそうです。

新型コロナが沈静化して教室は以前のにぎわいを取り戻し、生徒さんたちの笑顔がキラキラと輝いています。「次はこれを作ろう」「この前と同じ柄でインテリアを統一しよう」と、どんどん創作意欲が湧いてくるそうです。「ダネラは、手芸の経験があまりない方でも始めやすいと思います。ぜひ教室をのぞきに来てください」と小宮先生は呼び掛けられています。

講座見学などのお問い合わせは…
佐賀新聞文化センターカルチャー教室
TEL：0952-25-2160
株式会社 Sagashimbun Bunka Center
佐賀新聞文化センター
佐賀市白山2丁目7-1　エスプラッツ3階

講座一覧はHPから
お電話受付／9：30～21：30